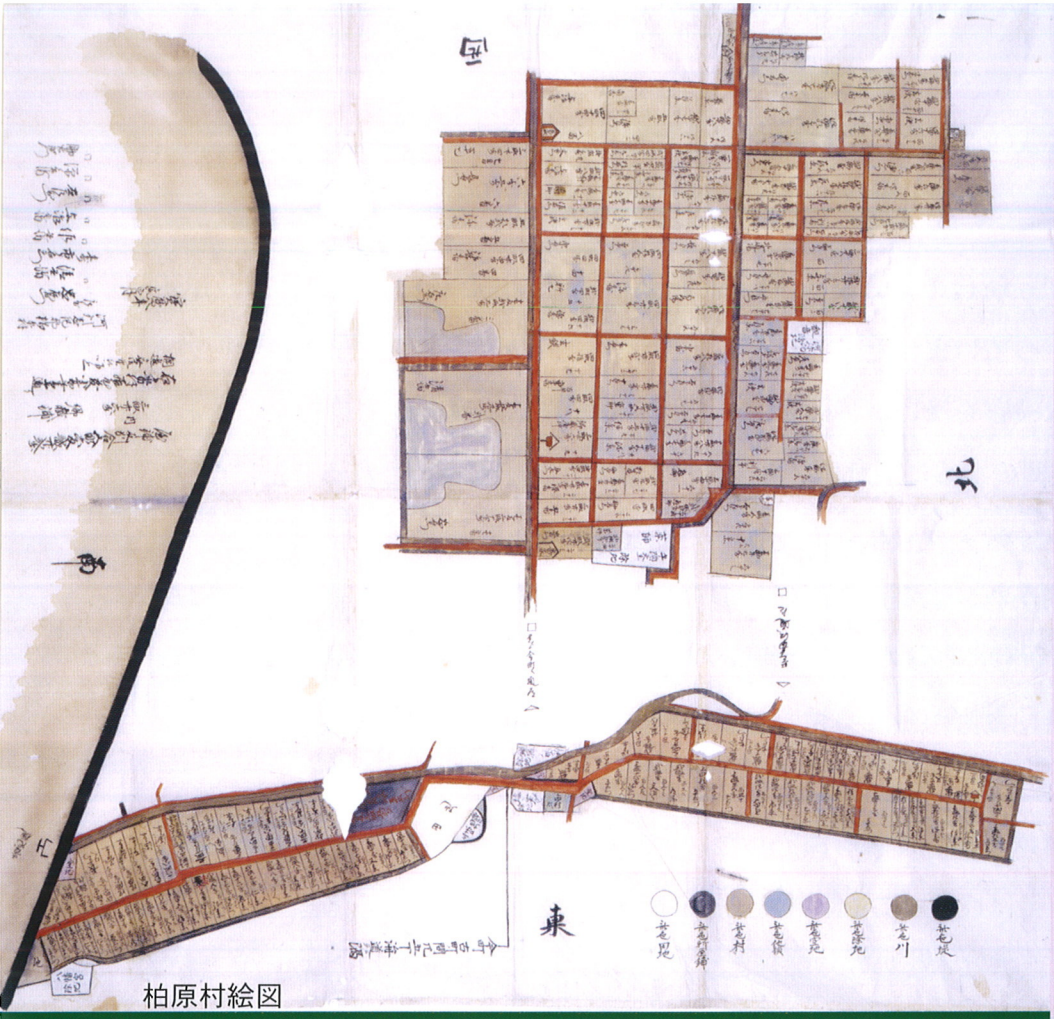
春季企画展

江戸時代の柏原村



柏原村絵図

2007年3月24日(土)から
6月10日(日)まで

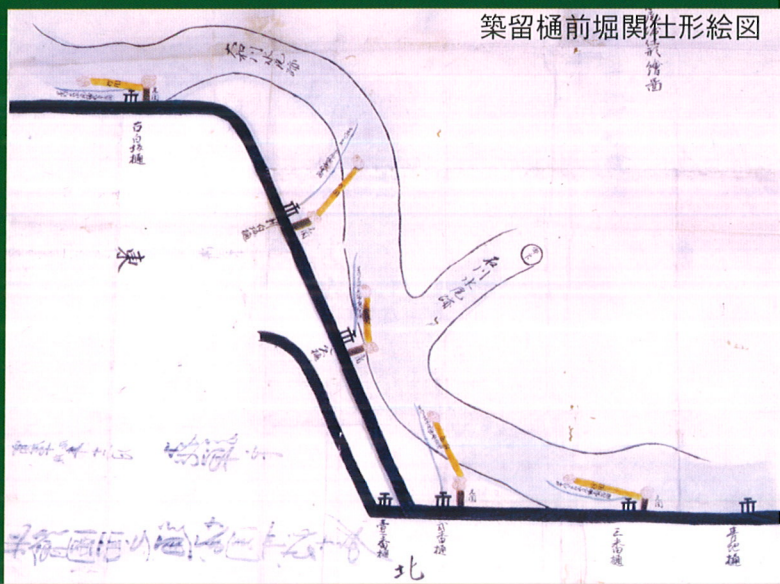
古文書や絵図から
江戸時代の柏原村が見えてくる…

開館時間　9時30分～16時30分

休 館 日　月曜日

入 館 料　無　料

交　　通　JR大和路線高井田駅から徒歩5分
近鉄大阪線河内国分駅から徒歩15分


築留樋前堀関杜形絵図

柏原市立歴史資料館

江戸時代の柏原村

河内国志紀郡柏原村は、江戸時代の初めごろ（約400年前）には、現在の国道25号線の八尾市との市境・本郷橋付近に広がっていました。それが、元和６年（1620）と寛永10年（1633）の大和川の大洪水により、大きな被害を受け、村は南西へ300ｍの現在の本郷の地に移転することになりました。そして、村の復興のために了意川から平野川を通る柏原船が運航されることになり、大坂の町人らが柏原村に移り住むようになりました。

奈良街道沿いには新町が開かれ、大坂から移転してきた人々が住むようになりました。それにともなって、もとの新町は古新町、さらに古町と名称が変わり、新町も後に今町と変わりました。このようにして、本郷、古町、今町から成る柏原村の形が整ったのです。

村の自治

江戸時代の柏原村は、一時期を除いて幕府領でした。寛政年間（1790年代）になると、村内でもめごとが多くなり、寛政９年（1797）に柏原村は東方と西方に分かれることになりました。東方は古町・今町と本郷の一部、西方は本郷の残り部分となり、東方は小山家が、西方は柏元家と松本家が交代で庄屋を務めることになりました。

村の人口と石高

柏原村は、江戸時代中期から明治にかけて、家数300軒前後、人数が1,400人前後でほぼ変化がなかったようです。それ以前には、洪水や古町・新町の建設などがあったため、家数や人数はかなり変動したと思われますが、くわしい史料は残っていません。土地の生産高を示す石高も、1,200石前後でほとんど変化がみられません。このうちの約60％が東方、40％が西方の石高です。

了意川と柏原船

奈良街道に沿って、了意川が流れています。現在は平野川ですが、かつては下流の平野川と区別して了意川と呼ばれ、今でも地元では了意川として親しまれています。

了意川は旧大和川から分流し、弓削から田井中を通って平野へ流れていました。江戸時代の初め、久宝寺村の了意という人が、船を通す目的で改修を試みたために了意川と呼ばれるようになったとされますが、くわしいことはわかっていません。

大洪水の被害から復興させるため、代官末吉孫左衛門によって、寛永13年（1636）にこの了意川を通る柏原船の営業が開始され、柏原村の発展の原動力となりました。

『河内鑑名所記』に見える柏原村